

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ゾラの初期作品について：『マドレーヌ・フェラ』と「ファム・ファタル」
Author(s)	佐藤, 正年
Citation	フランス文学, 12 : 23 - 31
Issue Date	1978-05-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040909
Right	
Relation	



ゾラの初期作品について

『マドレーヌ・フェラ』と「ファミ・ファタル」

佐藤正年

序論

ゾラの作品の大部分については、『実験小説論』などにおいて表明されている彼の主として遺伝についての新しい学説を踏まえた科学主義的な小説理論が、それへの理解の常套的な足掛りとなりがちである。また実際、作品のなかに科学的理論による支柱を持ち込もうとする意図が、『テレーズ・ラカン』制作期から早くもゾラの創作態度に根強く存在していたことに異論をさしはさむ余地はあるまい。そして、『ルーゴン・マッカール叢書』を着想した時期に当る1868年末の、

私の作中人物の諸性格は、生殖器によって決定される。それはダーウィンに由来する。文学とはそれだ。(註1)

という、ゴンクール兄弟に対するゾラの断言は、みずからの小説の新しさを遺伝の理論の応用に求め、これを縦軸として膨大なシリーズ小説を構築しようとする彼の意欲をうかがわせる。

しかしながら一方で、群衆が意志を持つ一個の巨怪な生き物に変貌したり、たとえば炭坑が怪物めいた生を帯びたりするという幻想的な描写などにも見られるような、怪奇なものグロテスクなものへの神秘的な好みもゾラの体質のなかに共存している。本小論では、初期において彼の文学観を支配した生理学的小説が何であったかをまず検討し、次に彼の神秘的側面が初期作品の時代にいかにか現われているか、またこのような側面が彼の言う科学主義といかにかかわっているかを考察してみたいと思う。

本論

ゾラは『ルーゴン・マッカール叢書』の構想を始めた1868年末に『マドレーヌ・フェラ』という小説を発表している。この小説は、これに先行する四作品『クロードの告白』(1865)『ある死女の願い』(1866)『マルセーユの神秘』(1867)『テレーズ・ラカン』(1867)とともに初期小説と呼べるようなものを構成している。初期作品におけるゾラの科学主義的な小説理論には本格的な遺伝という要素はまだ姿を見せず、主に生理学とでも称すべきものを基盤としているわけだが、この生理学という観点から見たゾラの

小説理論は、前作『テレーズ・ラカン』でその一応の完成を見ていたと言ってよいだろう。ゾラは、これを定義して次のように言っている。

私は『テレーズ・ラカン』で、性格ではなく、体質を研究しようとした。この本のすべては、この点にある。あくまで神経と血にもてあそばれる人物を選んだ。かれらに自由意志はない。その日その日の行為は、いつでも宿命的な肉体の本能に左右されている。テレーズとローランは人獣であって、それ以外のなにものでもない。この獣の体内の情念のひそかな働き、本能の衝動、ヒステリーの発作につづく頭の狂乱状態などを、私はひとつひとつとどろうとした。ふたりの主人公の恋愛は、欲求を満たすことだ。かれらが人殺しをするのは、姦通の帰結である。 (註2)

この引用においてわれわれの注意を惹くのは、作者の主たる意図が、人間の獣的な欲望の渴きを生理学者の眼をかりて捉え、その病的な現れでプロットを導き出すということにあるという点である。一見極めて人間的なものを連想させる苦悩あるいは後悔という言葉でさえ、作者自身の説明によれば、「単なる器官の不調」ないし「緊張しすぎて破れかけた神経組織の反逆作用」(註3) つまるところ肉体的、神経的組織の生理的混乱という意味しか付与されていないのである。かくして、作中人物たちの行動の動機は、ほとんどが心理主義的にではなく、生理学的な衝動によって説明される。

ところが『マドレーヌ・フェラ』となると、同じように生理学から借用した諸説を援用しているというものの、作中人物は欲望の充足に支配された動物的存在としてでなく、より人間的な意志を賦与された存在として登場してくる。主人公マドレーヌが転落するのは、ただ生活を良く導く術を知らないからであって、それは彼女が育てられてきた諸環境によって養われた奥深い体質の災いによるものである。

父親による愛情にみちた真率な教育と、父親の破産後に入れられた寄宿学校の偽善的な教育という矛盾する体験によって植えつけられた、一方では勇気と率直さ、そして他方では残酷さと冷淡さという複雑さが奇妙に混在するマドレーヌの体質がある。そして彼女に対置されて、ニヒリストの父親の徹底した子供への無視、母親がわりの狂信的プロテスタントの老婆によって吹き込まれた神罰への恐怖、そして学友から受けた迫害という諸環境のなかで精神、肉体の両方に刻み込まれたギョームの弱々しい体質がある。主人公マドレーヌの悲劇は、この二つの体質の不調和な組合せと、最初の恋人ジャックとの情事で彼女の身体に刻印された肉体的記憶とのあいだに生じる複雑な反応から導き出される。ここに前作までには見られなかった環境決定論が新しい重要な要素として加わってくるわけだが、作者はこの小説において、一つの体質がどのような環境のなかで生じ、他の異なった体質あるいは環境とのあいだでどのように作用するかを実験者の眼で観察しようとする。このことは、小説の構成が彼の生理学理論ならびに環境決定論の例証に最適の弁証法的配列を

採っていることから知れる。

第一章では、すでに恋愛関係にあるマドレーヌとギョームとの逢瀬が呈示され、前述したそれぞれの体質が具体的な言動によって暗示される。そして二人のあいだに醸し出されるちぐはぐな雰囲気からマドレーヌの過去についての注釈が準備される。第二章では、マドレーヌの体質が養われた環境を、父親との生活および寄宿学校での生活にまで溯って解説する。特に寄宿学校で友人から教唆されたコケットリーや偽善的態度への暗示は重要で、彼女がジャックと愛のない情事を交すに至る要因としての伏線の一つとなる。第三章では、第二章と対照的に今度はギョームの体質を決定づけた諸環境を詳細に述べる。第四章で物語は最初に戻り、以下次のような顛末を辿る。過去の恋人ジャックが夫ギョームの親友だったことを知ったマドレーヌは、持ち前の勇気と率直さから自己の過去を告白するが、自己の肉体の記憶のなかにジャックが生きていることを知って苦悩し、一方ギョームは妻マドレーヌとの新たな絆にと期待した娘にジャックと酷似した表情が現われるのを見て絶望する。こうして二人の結婚生活は破滅への一途を辿ることになり、ゾラが生理学的宿命と理解するものが、みずからの誤りに気付いて引き返そうとするマドレーヌの意志をも打砕いて、彼女を自殺へと追い遣り、ギョームを発狂させる。

ところで、ゾラはこの作品のテーマとも言えるものについて、

私は、この命題をミシュレとリュカ博士から得た。そしてこれを、きびしく確信のある方法でドラマ化したのである。(……)この研究は、生理学の観点から、結婚による絆を永久不滅のものとして受容れることを目差している。(註4)

(丸括弧は筆者)

と明言している。ここに言われている「この命題」とは何をさしているのだろうか。ジュール・ミシュレは、1858年に『愛』という著作を発表し、そのなかで夫婦間の愛の理想的なあり方を精神的な側面と生理的な側面から考察し、そこに当時の生物学者たちから借用した学説をかなり恣意的な方法で混ぜ合わせることによって、理想的な被創造物である女性は男性のために存在し男性によって創造されるということを証明し、併せて、女性、セックス、結婚といったものを神聖化しようとしている。この著作のなかに次のくだりが見出される。

受質 (imprégnation) した妻は、男になる。ひとたび男の力が女の裡に喰い込むや、女はその力に浸蝕され、次から次へと譲歩するようになる。男が勝って、女の奥深くまで入り込んでいく。女はますます「彼」になっていくのだ。

(註5)

また同書のなかに、次のような更に奇妙な言説が見られる。

受胎 (fécondation) は、永続的に女を変貌させる。寡婦は、再婚相手との

あいだに、しばしば前夫に似た子供をもうける。

(註6)

ここでミシュレは、ひとたび女性が結婚すると、そののち幾度結婚しても、最初の夫の体質の滲透によって受けた刻印は生涯を通じて消滅することなく、第二、第三の夫あるいは恋人とのあいだに生まれてくる子供にまでその特徴が伝達されることになるという奇妙な理論を展開し、第一回目の結婚がその後の全ての男女間の結びつきに打ち勝つとしている。これは理想的な夫婦の結合への素朴な讃歌であって、ここでは当然、不義による結びつきは問題外とされる。

端的に言って、ゾラがミシュレから得た命題というのは、直接的にはこれら二つの引用に述べられている不可解かつ非科学的とさえ言える考え方をさしている。しかもゾラはこの命題にほとんど手を加えず、生のままで作品のなかに持ち込んでいるのである。今これら二つの説を一応分離して、前者の説を《*imprégnation*》、後者の説を《*fécondation*》と呼ぶならば、まず《*imprégnation*》は『マドレーヌ・フェラ』のなかの次の一節がこれに対応する。

ジャックの腕のなかでわれを忘れていたとき、マドレーヌは、その処女の肉体に若者の消し難い刻印を受けたのだった。(…)それはまるで、ジャックに抱かれることによって、彼に似た姿に創り変えられ、彼から骨肉を与えられて、生涯、彼の所有物とされてしまったかのようなようだった。

(註7)

(丸括弧は筆者)

また《*fécondation*》には次の一節がより正確に対応する。

結婚してからというもの、マドレーヌは、単に自己を貸し与えていたに過ぎない。その否認できない生きた証しがあった。幼いリュッシはジャックに似ていたのである。ギョームとマドレーヌのあいだにできた子でありながら、この娘は父親に似ていなかった。マドレーヌはギョームによって受胎した。にもかかわらず、その子は母の胎内からジャックの顔立を賦与され、その刻印を帯ていた。父性は夫を跳び越えて、恋人にまで溯っているように思われた。間違いなく、マドレーヌの受胎のときに、ジャックの血が大量に流れ込んだのだ。処女を女にした男が、本当の夫となっていたのである

(註8)

これらを前掲の『マドレーヌ・フェラ』の梗概と併せて読むとき、ゾラがミシュレの提出した命題に範を取りながらも、これを少し異なった方向に展開させていることに気付く。すなわち、作中人物の心理の動きを一応度外視したものとしての肉体のドラマを根幹に据えて、「宿命に呪われ墮落する女性」つまり後述するような「ファミ・ファタル」を描こうとする自然主義作家ゾラとしては、ミシュレの所説に靈感を得ながらもそ

の理想主義を離れ、逆に女性や結婚を暗い色調で描いて、かつて行きずりの男に身を委せたことがその後の結婚生活を破滅させる要因となるという、愛のネガティブな側面を前面に浮び上らせるのである。

さて問題は、明らかに非科学的なミシュレの 《 *imprégnation* 》 《 *fécondation* 》 という命題が、あくまで科学的たらんと欲したゾラをなぜこれほど強く惹きつけたのかということである。この疑問に対してジョン・ラップは次のような解答を与えている。

私は、ゾラが（『愛』の）これら数ページを読んだときに、宿命という新しい概念を思いついたのだと考える。ミシュレが結婚と女性に捧げたうっとりするような詩は遺伝と生理学に助けを借りて、夫婦の絆が不滅であるということを強調せんとしている。（…）しかし、ゾラにおいて周期的に姿を見せる「生理学的宿命」という表現に至って、こうした肉体的絆は、悲劇的で、ひとを戦慄せしめるものとなった。おそらくこのようにして、ゾラは、ミシュレの唱えた肉体的類似性の伝達という理論から、プロスペル・リュカが、その *Traité de l'hérédité naturelle* で述べたような遺伝のさまざまな効果という理論へと移ることができたのであろう。

（註9）

（丸括弧は筆者）

ここでラップは、「宿命」という概念がゾラに芽生えたのは、彼の関心が生理学から遺伝へと移行しようとするその過渡的段階においてであったと考えることによって、ゾラの医学への傾倒の深まりという脈絡からこの問題を把握しようとするのである。実際、作品のなかでも「生理学的宿命」なるものは強調される。

どんな女性であれ、その腕に抱かれた男と物腰が似てくるという傾向があり、その結果、しばらくするとマドレーヌはみずからの表情の幾つかを変え、ジャックの不断の表情を帯るに至ったのだった。しかしそれは、マドレーヌをジャックに結びつける生理学的宿命の一つの帰結だったのである。

（註10）

・これは娘リュッシンに現われたジャックに酷似した表情を妻マドレーヌのなかにも見出し、苦悩するギョームの描写に続く作者自身の説明的叙述に相当する部分だが、ここに見るように、ゾラの頭のなかでは「宿命」という概念は生理学と不可分のものとなっている。したがって、ラップの見方は説得力を持っていると言ってよい。

しかし、われわれがここに見ようとするのは、極めて迷信的な、私たちが俗に言う因果、因縁の世界である。なるほどゾラは、先に述べたような命題をミシュレとともにプロスペル・リュカ（註11）からも借用したと述べている。だが、彼が本格的にリュカの医学書に取り組むのは、『ルーゴン・マッカール叢書』のプランニングに着手する頃からである。

(註12) 事實は、不純な恋愛が蒙る必然的な懲罰というものを例証するのに恰好の材料をミシュレの著作に見出し、これに医学的根拠を与えんがためにリュカの理論を勝手に翻案し、ミシュレの所説に接木して、実際の父親がギョームであるにもかかわらず、マドレーヌが最初に肉体関係を持ったジャックの特徴がリュッシンに現われてくるというように、遺伝を単なる肉体的特徴の伝達という面で捉えて、実験的にそして神秘化した形で扱ったのではないか、あるいはまた、ミシュレがしばしばリュカの学説を傍証としている事情(註13)に鑑みての言及だったのではないかと推測されるのである。したがって『マドレーヌ・フェラ』という実作品のなかで注目せねばならないのは、能う限りみずからの小説を医学に近づけようとする作者の意識的態度にもかかわらず、生得のものとして彼が気質の奥深くに隠し持っていた迷信的なもの超自然的なものへの好み、実際的な現われとして無意識的に出てきているという点である。この意味で、いわば前述したようなヴィジヨネールな想像力に身を委ねやすいこの作者が、ロマン主義を特徴づけた怪奇的世界への好みを脱しきれぬ気質をひそめていたと言ってよいだろう。それゆえにこそ、科学的ならんとながら非科学的な嗜好へと押しやられるという現象が見られるわけであり、『マドレーヌ・フェラ』で強調されている「宿命」という概念も生理学における必然的帰結というより、作者の神秘的想像力に源を発する、言うならば因果・因縁めいた迷信談義だという感を深くさせる。

このような矛盾した性格は、遺伝を中核として第二帝政下での一家族の歴史を描出した作品であると作者が自負した、あのシリーズ小説にさえ現われずにいない。たとえば今、ルーゴン、マッカール両家の発祥を語る第一巻『ルーゴン家の運命』を持ち出すならば、そこでは、サン・ミットル旧墓地がプラッサンの町に対して行う怨念からの復讐が隠然たるテーマをなしている。その復讐とは、古くさい城郭都市プラッサンで安逸な生活をむさぼる保守的な人びとから冒瀆を受けた聖域サン・ミットルの土地の怨念が、この地を楽園とするマッカール家の子孫シルヴェールを革命家に育てあげ、みずからの受けた侮辱の報復を人民蜂起への彼の参加という形で託すというものである。そして面白いことに、土地の怨霊の呼びかけがシルヴェールの耳に聞えたり、そこに繁茂する草が彼の足をつかんで訴えかけるという、ユゴーなどによく見られる幻想が随所に現われるのである。

ところで、アンリ・ミッテランも

『クロードの告白』『テレーズ・ラカン』『マドレーヌ・フェラ』は、墮落した女性、呪われた女性をテーマとする一種の循環小説と見做してよいだろう。

(註14)

と指摘するように、これら初期三作品には「ファミ・ファタル」のテーマが一貫して流れている。では「ファミ・ファタル」とはいかなる女性を言うのであろうか。この点につ

いてラップは、マリオ・プラッツの『ロマン主義の苦悩』という著書の助けを借りて、これに次のような定義を与えている。

ファム・ファタルの恋人は「一般に年が若く、その態度は消極的である(…)」とプラッツは書いている。ファム・ファタルの性格は、ほとんどの場合、嗜虐的であり、その支配力を発揮して恋人を苦しめることに歓びを感じる。しかも、その破壊力を十分に意識している。肉体的には永遠の娼婦型。(…)再びプラッツの表現を借りれば、ファム・ファタルは「メンドーサの美しさ」を有する。

(註15)

(丸括弧は筆者)

このラップの説明に見るように、特にキリスト教社会では、「ファム・ファタル」は言うならば反価値的な、魔女的性格を持つ女性である。そのような破滅の宿命を『マドレーヌ・フェラ』ではギヨームの乳母を務める狂信的プロテスタントのジュヌヴィエーヴが、旧約聖書に語られている神罰の話によって預言する。

それにしても、初期作品だけを見てもすでに三度も破滅型の女性が採り上げられているという事実は、ゾラにおいて何を意味するのだろうか。このような女性の結婚生活の破綻を描いてブルジョワ社会の諸矛盾、諸悪を暴くというより、それは、

意識的に男を苦しめる女性は、ある古い文学的伝統に属している。すなわちファム・ファタルの伝統であって、このロマン主義的なタイプは、19世紀文学のどの化身よりも生き永らえた。

(註16)

というラップの指摘と併せて考えるとき、リアリストたちが行なう社会批判という枠組をはみ出した別の問題を含んでいるように思われる。すなわち、破滅型の女性はその魔力を伝播し、まわりの人びとの運命をも引きずり狂わせるのであるから、これは反キリスト教的性愛の宿命の象徴、換言すれば一種のサタニズムであろう。ゾラの文学的生涯の円熟期に書かれた小説『ナナ』にさえ「ファム・ファタル」のテーマが受け継がれていることを考えあわせるならば、彼がみずから課した社会批判という文学的使命の陰に、サタニズムへの関心が無視し得ぬ位置を占めていることが解るのである。

結 論

以上に見てきたように、ゾラの裡にも超越的なものへの隠れた嗜好があって、ここから「ファム・ファタル」のようなサタニズムや、因果、因縁といった要素が滲み出してくるものと思われる。この意味で唯物主義の立場をとり、科学主義を標榜してはいても、彼の精神構造には神秘主義が深く根を下ろしていたと言えるのであり、またこれが却って、彼の文学制作の狭隘な方法論に対するいわば中和剤となって、作品を潤いあるものとしてい

るという幸運も見逃し得ないのである。

- 注 (1) Armand Lanoux ; *Bonjour, Monsieur Zola*, Le Livre contemporain - Amiot - Dumont éd, 1954, p. 101.

これは、1866年12月14日に、ゴンクール兄弟を訪ねたときのゾラの発言である。なお、この日付のゴンクール兄弟の日記には、この一節は見当たらないが、アルマン・ラヌーはある機会に恵まれて、その会見内容を知り得たと断わっている。

- (2) Œuvres Complètes d'Emile Zola, Cercle du Livre Précieux éd, 1962, tome 1, p. 519. (Préface de la deuxième édition de *Thérèse Raquin*) なお、小林正氏の訳を参照させていただいた。
- (3) *ibid.*, p. 520.
- (4) *ibid.*, p. 900. (Causerie d'Emile Zola dans « La Tribune », le 29 novembre 1868)
- (5) Jules Michelet ; *L'Amour*, Librairie de Hachette et Cie éd, 1870, p. 207.
- (6) *ibid.*, p. 17.
- (7) Œuvres Complètes d'Emile Zola, Cercle du Livre Précieux éd, 1962, tome 1, p. 812.
- (8) *ibid.*, p. 813.
- (9) J. C. Lapp ; *Les Racines du Naturalisme, Zola avant les ROUGON - MACQUART*, Bordas éd, 1972, p. 114.
- (10) Œuvres Complètes d'Emile Zola, Cercle du Livre Précieux éd, 1962, tome 1, p. 858.
- (11) プロスペル・リュカ —— フランスの医師。1805年生れ。
De l'imitation contagieuse と題する論文によって医学博士の称号を受ける。医業を続けるかたわら、研究に励む。
- (12) この点については、*Les Rougon - Macquart*, Bibliothèque de la Pléiade éd, 1967, tome 5, pp. 1692 - 1722. を参照されたい。
ゾラは『ルーゴン・マッカール叢書』の準備ノートの中かで、多くのページを費してリュカスの書 *Traité de l'hérédité naturelle* の要点を書き留めている。この準備ノートを編集した、アンリ・ミッテランは、このリュカスについてのノートは、1868年末に書かれたとしている。(p. 1672. 参照)

- (13) たとえば, *L'Amour*, Librairie de Hachette et Cie éd, 1870,
P. 17. あるいは P. 449. 参照 .
- (14) Armand Lanoux et al. ; *Emile Zola*, Hachette éd, 1969,
p. 105.
- (15) J. C. Lapp ; *Les Racines du Naturalisme, Zola avant les*
ROUGON - MACQUART, P. 116.
- (16) *ibid.*, P. 116.

(広島大文学部 助手)